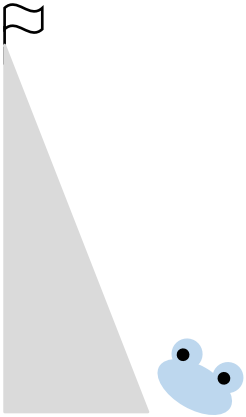
第１章

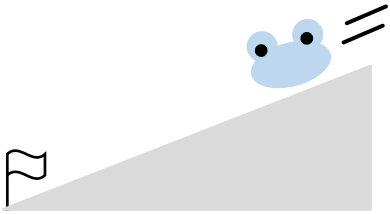
授業場面の困りごと

指導から支援へ



「子どものゴール」を

ほんの少し変えるだけでうまくいく



1 授業が成立していない学級

先生の困りごと

授業がうまくいっていません。子どもが騒いで話を聞いてくれず，注意ばかりになってしまいます。授業をしていても，何をどう変えてよいのか分かりません。自分なりに準備して授業をしているつもりなのですが……。

あるあるパターン

① 課題を与えても，与えっぱなしになっている。評価がない。
② 目立つ子どもや問題行動ばかりに注目してしまい，地道に頑張っている子どもへの承認ができていない。

なんでこうなるの？

「指導と評価が一体化」していないと，「授業が成立していない」という状態を生む

「授業が成立していない」学級の状態は様々ですが，その多くは，「指導と評価が一体化していない」状態といえます。リーダーシップをもって教師が指導し，子どもが学び，教師が評価をする，これが「指導と評価が一体化」している状態です。この歯車が狂ってしまうと，少しずつほころびが生まれ，やがて授業は成立しなくなります。

あったか秘策 Change!

1 まずは「〇分間」授業に集中するための授業設計

一 ゴールにつながるスタート〇分間が勝負

「授業の終わりに，何が分かって何をできるようになっているか」という子どもの姿が「ゴールの姿」です。そのゴールを具体的に描いてみましょう。その姿を達成するためには，まずは授業のスタートが勝負です。スタートで崩れてしまうと，立て直すのは容易ではありません。スタートの〇分間をどうするか，きめ細かく計画することがゴールにつながります。

二 ほんの少し頑張ればできる課題の設定

よいスタートを切るためのコツの一つは，「少し頑張ればできる」課題にすることです。このさじ加減が，子どものチャレンジ意欲へとつながります。

また，子どもたちにとって課題が分かりやすいかどうかも重要です。例えば，「絵を見て，書かれている順番を考えよう」だと，一見簡単そうですが，実は二つの作業が含まれています。発達段階によっては難しいでしょう。この場合，それぞれの課題に色を付けて順番に黒板に書くなど，提示の仕方を工夫したり，もっとシンプルな文章の課題に設定し直したりするなどの工夫が必要です。

三 ペア・グループ活動の活性化

子どもの活動性を高めるためにも，ペア・グループ活動を随時入れていくとよいです。試行錯誤できる課題に対して，グループで考えることで，活動が活性化します。

また，ペア・グループでの活動に対しての評価を入れることで，さらに活動が活性化していきます。例えば，「二人で頑張っていたね」「ペアでの成果だね」「仲間との支え合いが，先生も嬉しかったよ」など，はっきり伝わる言葉で価値付けて，ペア・グループで伸びていくことができる集団にしていきましょう。

2 指示が通らない学級

先生の困りごと

授業中に私が指示をしても，子どもたちがなかなか指示どおり動いてくれません。友達と遊び始めたりすると，より指示が通りにくくなって困っています。

あるあるパターン

① 「聞いてください」と何度も繰り返し注意をする。
② 「今，何をするときか分かっていますか」と責める。

なんでこうなるの？

指示があいまいで，長くなっている

教師が指示をするときに，子どもたち全体に向けて，口頭で指示を１回出しただけで終わっていることが多くあります。子どもによっては，１回の全体に向けた指示だけや，言葉のみで次々と指示された場合，理解できなかったり，見通しをもちにくかったりすることがあります。そのため，いざ行動する際，何をやったらよいかよく分からず，後から質問が続くことになります。

あったか秘策　Change!

2 目で見て、記憶に残る指示の出し方

一 注目させること

指示は２回することが必要です。確実に注意を引き付けてから指示を出します。

- 注意喚起は短めにする。
  「待って」「ここ見て」「ストップ」
- 指示はシンプルにする。
- 静かになるまで待ってみる。
- 「今から指示をするよ」というジェスチャーを決めておく。

二 視覚的な指示を行なう

黒板を使用した視覚的な指示も効果的です。
授業の流れを事前に知らせることも有効です。
（例）「めあて」「問題を読む」「自分で考える」「ペア」「話し合う」などをカード等で提示

三 どこにいても分かるように書く

【課題】の指示と【行動面】の指示を黒板に書きます。

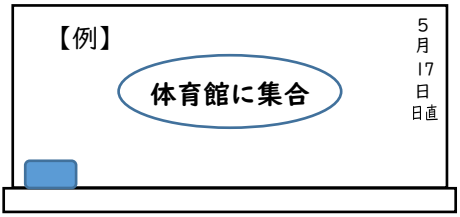
【課題】の指示について

☆　「何をどこまでやるのか」を明確にする。

☆　「どのように取り組むのか」活動方法を明確にする。
例：二人組で，四人組で

【行動面】の指示について

☆　「黒板に書くときに赤色で囲むよ」とか「今黒板に書いているのは，みんなにしてもらいたい行動の内容だよ」など指示についてのルールを決めておく。



3 私語が多い学級

先生の困りごと

授業中に私語をしている子どもが増え，やめるように注意をしていたのですが，気付けば，注意をする回数がだんだん増えてしまっている状態になって困っています。

あるあるパターン

① 「静かに！静かに！」と何度も繰り返して注意をする。
② 「今は〇〇さんが発言しています。みんなちゃんと聞きましょう」と話を聞くように促す。

なんでこうなるの？

言っても変化が起きない注意や指示ばかりが増えている

私語が多いと，ついつい「静かに」や「今話している人を見て」と注意をしてしまいがちです。聞いたほうが役に立つ，よいことが起こると子どもが感じることができなければ，一瞬は静かになっても，またすぐに私語が始まり，注意する前よりざわついた雰囲気になることもあります。

また，最初に私語をした子どもへの指導がうまくいかないと，一人の子どもがひっかき回し，私語が増えてしまいます。

あったか秘策　Change!

3 私語をしない時間をつくり、できたら認める

一 まずは５分間，私語をせずに過ごす時間をつくる

「授業の最初の５分間は黙って集中する」というルールを決め，できたらシールを貼ったり，「できたね」という認める言葉をかけたりします。

二 強化と弱化の両方を使いながら教師がコントロールする側に

子どもの私語の中で，受け止めることのできる私語と受け止められない私語を教師がコントロールします（強化と弱化）。例えば，子どもの私語の中で「授業に関すること」や「手を挙げて発言したとき」は，「その考え方はいいね」とか「よく知ってるね，すごいね」などと発言を認め（強化する），「授業に関係のないこと」や「挙手なしの発言」はスルーして，取り上げない（弱化する）ようにします。

三 おしゃべりタイムでメリハリをつくる

話すことが好きな子どもに話す機会をつくります。話す題目を決めて２分間，自由に話していい時間をつくるのも一案です。「今は話してもいい時間」をつくることで，「話す時間」と「聞く時間」のメリハリをつけます。

四 主体性をもって授業に参加させる

子どもが主体性をもって参加できるように，授業を工夫しましょう。聴かせるための工夫として，視覚支援を行ったり，授業の活動にメリハリをつけたりすることも有効です。

また，授業の導入時には具体物や視覚教材を使うなど興味をもたせるような工夫や，学級の仲間との対話的な活動を入れる工夫なども積極的に取り入れてみましょう。

4 教師の話が聞けない学級

先生の困りごと

いつも騒がしくて，話を聞いてくれません。説明も全部しているのに，「先生，何やったらいいが？」と聞いてきます。「聞き方名人」という聞き方スキルも掲示しているのに，全然見てくれません。逐一付き合っていては授業が進みません。

あるあるパターン

① 聞き方のスキルを掲示しているが，形式的になっている。
② 「聞いていない人が悪いから」と，どんどん説明を進める。

なんでこうなるの？

話を聞くことの意義が理解できていない

子どもたちが教師の話を聞くことができるようになるためには，「話を聞く態度」を育てることが大切です。しかし「聞き方のスキル」だけだと，技術的なことだけに終始し，いつの間にか何のために，どうして話を聞くことが大切かという意識が薄れ形骸化してしまいます。

あったか秘策　Change!

一　まずは聞く練習から

例えば「今から聞くことに集中します。話が聞ける用意はできていますか」と「聞く」ことに子どもの意識を向けさせます。

その後，全員を立たせて話をし，「話の内容が分かった人から座ります」という指示を出します。分からない人が最後まで残ってしまうことに配慮するには，座らせておいて話をして「話の内容が分かった人は立ちます。分かった人は隣の人に教えてね」とするとよいでしょう。この練習を繰り返し行うことで，「今度はあなたが教える番だね」と全員が話を聞く態度が身に付くようになります。

※　楽しみながら聞く練習として，構成的グループエンカウンター☞p.131の「聖徳太子ゲーム」なども取り入れてみてはいかがでしょうか？

二　指示を明確に　～数字の活用～

「今から１分間話をします」とか「三つの大切なことをみなさんに伝えます」など時間やナンバリングの手法を使って話をすると，子どもたちの集中力はグッとアップします。また視覚教材を使うことで，視覚優位の子どもたちにとっても聞くことが苦痛でなくなります。

三　成功の責任追及

全員が集中して静かに教員の話を聞くことができた時には，「さすが，話をよく聞けたことで〇〇ができるようになるね」「〇〇ができたからうまくいった，あるいはいいことがあった」という成功の責任追及☞p.134を入れ，聞くことの大切さを伝えます。

5 マイナス発言の多い学級

先生の困りごと

授業中，「今日は〇〇をしますよ」と言うと「えー」「なんでー」というようなマイナス発言が出ることが多くあり，それが学級全体に広がり困っています。

このような発言があると，学級の雰囲気や子どもたちのやる気が一気に下がってしまいます。

あるあるパターン

① 「そんなことを言ったらいけません！」と叱る。
② マイナス発言をした子どもをにらむ。

なんでこうなるの？

授業が面白くない

もともと子どもたちは考えたり作業したりすることが好きです。ところが，ひたすら教師の話を聞くばかりの授業だったり，ワークシートやノートに写してばかりの授業だったりすると，子どもは「面白くない授業」と感じているかもしれません。

また，こうしたマイナス発言は，引き下げの心理☞p.136による場合もあります。その子ども自身のできていることに注目し，プラスの行動を承認する機会をつくっているでしょうか。

あったか秘策 Change!

5 感情は受け入れて、行動を変える 子ども主体の授業を取り入れる

一 まずは言い分を聞く

①　まずは子どもの言い分を聞きます。

②　具体的な対応策につなげます。→子どもが自分の思いにこだわり続けるときには，他の人からのアプローチも有効です。

マイナス発言を否定するのではなく，教師の気持ちを伝えることで相手の変容を促すと，反発を生みません。

「静かにしなさい！」という言い方ではなく，「私はみなさんに〇〇してほしいです」とＩ（アイ）メッセージ☞p.130で伝えます。

二 意義を伝える

一番大切なのは，今日の授業で学ぶことの意義を伝えることです。

例えば，「大人になったときに，そのことを知っていることできっと未来がより明るくなるよ」という感じです。

三 子ども主体の授業にする

授業の構成に変化をつけ，答えのない課題について「ああかな？こうかな？」と考えることの楽しさや，子どもが活動する時間をつくるなど，子ども主体でワクワクする授業の工夫をしましょう。

四 どんな学級にしたいのかを話し合う

お互いに足を引っ張り合うマイナス方向の学級にしたいのか，ポジティブなプラス方向の学級にしたいのかを話し合います。

「この学級をどんな学級にしたい？」「どんなことができるようになりたい？」と問いかけることで，どのような学級にしたいのかを話し合いましょう。

パーソンポジティビティ☞p.136による効果が，互いに認め合い高め合える集団をつくるのです。

6 雰囲気を壊す行動をする子に我慢している学級

先生の困りごと

私語，多動，席立ちをよくする子どもがいます。

周りの子どもは，物を取られたり，ちょっかいを出されたり，物を投げつけられたりしています。関わることのできる人が少なく，特定の子どもへの負担が大きくなっていっています。

あるあるパターン

① 仲のいい子どもと席を近くにするといいと考えて席を近くにして「Ａさんのこと気を付けてあげてね」と子ども任せにする。

② 「みんな大変だよね，でもＡさんのために我慢して！」

なんでこうなるの？

頑張っている子どもに対して認める指導が少なくなっている

「雰囲気を壊す行動をする子」を教師が特別扱いしていると感じている

教師が「雰囲気を壊す行動をする子」にだけ注目し，その子どもに関わる時間が多くなると，頑張っている子どもたちを認める機会が減り，周りの子どもたちは不満を感じるようになります。

また「雰囲気を壊す行動をする子」は配慮の必要な子どもだからと，周りの子どもたちに協力を求めることが続くと，頑張っている子どもにしてみれば，「先生はＡさんを特別扱いしている」と感じてしまいます。また，協力を求められた子どもの負担が大きくなり，しんどさを抱えてしまうことも起こりかねません。

あったか秘策　Change!

6 「モデルを示す」「認める指導を意識する」

一 教師が，子どもへの関わり方のモデルになる

教師の言動は学級の子どもの行動のモデルです。まずは，雰囲気を壊す行動をする子どもへの関わり方のモデルを教師が示します。

例えば「〇〇しない」と否定的に話すのではなく「〇〇しよう」と誘いかける，「いい加減にして！」「ちゃんとして！」と抽象的に伝えるのではなく，「足を床につけて椅子に深く座ろう」と具体的にどうすればいいのかという行動を提案します。

不適切な言動の時には「嫌なことを言われて腹が立ったの？」と気持ちに共感しながら，「でも叩かれた友達は痛いよ」と叩かれた人の気持ちも伝えます。

二 一人一人の頑張りを認める

全ての子どもたちが教師から認められていると感じることができるように，「既にできていること」に着目して「できているね」という認める指導を行うことを意識します。よい行動ができたときに，すかさず「ありがとう」「うれしい」「助かった」と伝えることも効果的です。

認める指導を行うことで，「先生はいつも私のことを見ていてくれる」という教師からのメッセージが伝わります。

三 短いスパンでほんの少し頑張ればできるゴールを設定

学級としてどのような姿になっていればいいかを，子どもたちと一緒に考えて取り組みます。

うまくいくコツは「短いスパンでほんの少し頑張ればできるゴールを設定すること」です。そのためにどんなことをするか話合いをして，取り組むことを決めます。ほんの少し頑張ればできるようなゴールを設定することで，子どもたちを認めるチャンスが増える，まさに一石二鳥の取組です。

7 学習規律が身に付かない学級

先生の困りごと

入学当初から落ち着かない状態が続き，学習規律をどう身に付けさせていけばよいか悩んでいます。例えばチャイムで席に着くことができていなかったり，授業中にごみを捨てに席を立ったり，発表者の話を聞くときのルールが守れていなかったりします。

あるあるパターン

① 「ちゃんとしなさい」と理由も言わず何度も繰り返し注意する。
② 「なぜできないのか」を追求してしまう。

なんでこうなるの？

学習規律を守ることの意義が子どもたちに伝わっていない

教師にとっては，学習規律というルールを守るのは当たり前のことですが，子どもたちにとっては，その意義や必要性，それを守ることで自分たちにとってどんないいことが起こるのかが理解できていないこともあります。「早く，学習規律を身に付けさせよう」と焦るあまり，必要性や意義，ねらいなどが子どもたちに伝わっていない可能性があります。

あったか秘策 Change!

7 学習規律が身に付くとどんないいことが起こる？

一 学習規律について子どもたちに考えるきっかけを与える

まずは学習規律の定義を，子どもたちと確認することが大切です。自分たちで学習規律を決めるのもいいでしょう。このとき，自分たちで考え，発表することが大切です。そうすることで楽しみながら学習規律を確認できます。「どうしてチャイムを守らなければならないのか」その必要性が分かったとき，自ずと学習規律を守る態度が身に付くはずです。

子どもたちには情報として「学習規律が守れた学級は，みんなが楽しいと思えるレクリエーションができているよ」ということを伝えたり，「この学級で成長したって思えるよ」という話をしたりして，自分たちの学習規律について考えるきっかけを与えて，考えさせることも有効です。

二 モデルとなる行動を全体に伝えることで学習規律づくり

「姿勢がいいね」「手の挙げ方がいいね」などと，モデルとなる行動を全体に伝えることで，学習規律づくりにつながります。名前を呼び，間をおいて何がどうよかったのか，その具体が分かるように伝えます。また，感情を込めて伝えるとさらに子どもには伝わります。「先生は〇〇でうれしいな」などＩ（アイ）メッセージ☞p. 130を付け加えるとさらに効果的です。頑張ったことを教師に認めてもらえたと子どもが感じることができる環境づくりをしてみましょう。

三 学習規律を視覚化して提示

話の聞き方や机の上の準備物，プリントの配り方等の学習規律を視覚化して提示しましょう。例えば，プリントの配付については，どのメンバーに配付するのかを決めておき，渡すときに「どうぞ」「ありがとう」と言う学習規律をつくっておけば，子ども同士の人間関係づくりにもつなげることができます。また，号令や話を聞く姿勢については，妥協をせずに指導を重ねていくと，学習規律が次第に身に付いていきます。

話を聴く，ノートを書くなどの行動や，指示をする，褒めるときの声のトーンなど，メリハリをつけることを意識してみましょう。

また，授業の１時間の流れやめあてを黒板に提示して視覚化すれば，子どもも見通しをもって授業に臨むことができます。課題に取り組むときには，タイマーを準備して表示すると，時間を意識する手助けになります。

8 集中して学習することが難しい学級

先生の困りごと

私の学級の子どもたちは，集中力がなく，授業中ぼーっとしたり，すぐに手遊びを始めたり，友達の発表を聞いていなかったり……。とにかく集中して授業に参加することができなくて困っています。

あるあるパターン

① 分かりやすくしようとして，教師がどんどん説明し，話が長くなる。
② 「集中しなさい」「ちゃんとやりなさい」と怒る。

なんでこうなるの？

集中を持続させるための授業構成の工夫や展開のメリハリが不十分

45～50分間を集中し続けることは，内容によっては大人でも難しいものですよね。だからこそ，子どもたちが45分間又は50分間の学習に向かうことができるようにするためには，授業構成や指導技術の工夫などの教師の手立てが必要です。

あったか秘策　Change!

8 時間と活動内容に変化・メリハリをつけた授業展開

一 動きのある授業

立つ・座る・歩き回るなど，意図的に動きのある活動を取り入れてみましょう。例えば，「全員立ちます。詩を読みます。読み終わったら座ります」「自分と同じ意見の人を見付けに行きましょう」などと，意図的に動きのある活動を授業に取り入れます。学級の状態を見極めながら，ペアやグループの枠を越えた交流にもチャレンジしてみるのもよいでしょう。よいガス抜きになっているのであれば，少々違う話をしていても大目に見るという対応も場合によってはOKです。

二 発表・発言スタイルのバリエーションを増やす

挙手→指名→発表のみで進む授業から脱却し，子どもに飽きさせない，一部の子どもだけで授業を進めない工夫をしましょう。

挙手→指名による発表	意図的な指名による発表	席の順番や列ごとに発表	ペアの相手の話の内容を発表
グループ協議後発表	予告・予約して指名，発表	「せーの」で全員発言	気が付いたことを自由起立発表

発表・発言スタイルのバリエーション

三 時間で区切る授業設計

授業構成を考える際，大まかに時間を区切って授業を設計していくと，授業にメリハリがつき，子どもが集中しやすくなります。

例１　小学校算数の時間

めあての確認・自力解決（柔軟な助け合いもOK）15分 → グループ交流・全体での共有 15分 → まとめ・適応問題 15分

例２　中学校理科の時間

説明 5～10分 → 実験 30分 → 考察・まとめ（グループ協議も含む）10～15分

9 意欲が低い・無気力な学級

先生の困りごと

私の学級は，学習意欲が低くて悩んでいます。すぐに「分からん」「できん」と言います。授業をしていて，子どもたちのやる気が感じられず，私もやる気をなくしてしまいそうです。

あるあるパターン

① 子どもの「分からん」の声を放置している。
② 子どもの実態に合っていない，高過ぎる目標を設定している。

なんでこうなるの？

子どもの「分からん」は，「分かりたい」の裏返し

子どもは本来，学ぶ意欲をもっているものです。しかしながら，学習につまずいたり，教師の意図が伝わらなかったりすると，「分からん」と困ってしまいます。困り感が続き，どんどん膨らんでしまうと，学習することや考えること自体を諦めてしまうことがあります。これらの積み重ねが，「意欲が低い・無気力」という状態を生み出してしまうのです。

あったか秘策　Change!

9 「できていることへの価値付け」から

一　こまめに赤ペンで〇を入れる

授業中黒板から離れて子どもたちのところに行き，少しでも課題に取りかかることができていれば，「できたね」と，赤ペンで〇を入れて回りましょう。突っ伏している子どもには「励ます関わり」が有効です。「具合悪い？大丈夫？まずノート出そうか。黒板のここを写すよ」と，起きてできることを細かく示して，課題着手まで促す，付き合う，そして少しでもできたら〇を入れる，そして「よし，できたね」の言葉かけが肝心です。

二　「できた感」づくり

現時点で「できること」を意図的に仕組み，「できた感」が確実にもてるようにすることから始めましょう。この積み重ねが，課題に取り組もうとする姿勢を引き出します。手本を見せて，「できそう」と思わせるようにすることも有効です。

また，「隣の人に相談してみてもいいよ」「ご近所さんと助け合ってね」と，柔軟にペア・グループで考えることをOKにし，一人で困る状況を放置しないようにします。学びにおいて，助け合える集団づくりを目指していきたいですね。

三　一人一人の小さな変化に気付く

子どもたちの意欲を高めていくためには，教師が，子どもたちの小さな変化に気付けるようにならなければなりません。そのためには，子どもをよく「みる」ことです。いつも課題を面倒がっている「あの子」が，自分から進んで書き始めた瞬間。授業中よく寝ている「あの子」が，ふっと顔を上げた瞬間。話を聞いているのか聞いていないのか分からない「あの子」が，つぶやき始めた瞬間。そこには，「あの子」の心を動かす「何か」があったはずです。子どもが意欲を出した瞬間を逃さず，すかさず反応してあげたいものですね。小さな変化を見逃さないようにするためには，教師自身の心のゆとりが大切だということも忘れずに。

10 人の意見を受け入れない子がいる学級

先生の困りごと

学級会で自分の意見をどうしても曲げず，人の意見を受け入れない子どもがいます。最後には結局その子どもの我を通してしまう結果になります。

あるあるパターン

① 「もっと他の人の意見を聞こうね」と，一応言葉をかける。
② 「決まったことだから従いなさい」と言って周りの子どもに諦めさせる。

なんでこうなるの？

子どもたちの中に暗黙の上下関係ができている

学級では一部の声の大きな子どもに学級の雰囲気が支配されてしまうことがあります。みんながそれでいいと思っているわけではありません。このようなときは，子どもたちの中に上下関係を感じるような空気ができていることが考えられます。力や運動能力など，努力すれば変わる上下関係ではなく，コミュニケーション能力（特に自己主張力や共感力，同調力）による上下関係が強くなり，空気を読むことが強要されていることもあるかもしれません。

このような空気が存在すると，「仲間外れになりたくない」との思いから，しぶしぶ声の大きい人の意見に従わざるを得ない状況が生まれてきます。

あったか秘策 Change!

10 他の人の意見に気付くことのできる体験を

一 バリエーションに富んだ表現活動をたくさん実施

多様な意見をもつためにも，多くの意見を引き出すことのできるブレーンストーミングの手法を授業や特別活動，総合的な学習の時間，道徳科などの時間に意図的に取り入れます。

（例）　新聞紙の使いみち
　　・防寒　・靴を乾かす　・チャンバラ　・押し花……
（例）　さんずいの付く漢字
（例）　まるいものと言えば？

二 自分一人では完成できないグループワーク・トレーニング

グループワーク・トレーニング（GWT）とは，グループ（G）に与えられた課題（W）を目的に合わせて練習・訓練（T）する体験的な学習です。ルールを守りながら解決していく過程で，協力したり葛藤を乗り越えたりすることで，自分や他人の言動・感情・考え方などに気付くことができます。

「わたしたちのお店やさん」（参考文献　改訂　学校グループワーク・トレーニング，図書文化）やあったかプログラム☞p.130の「先生たちの住むマンション」など，自分がもっている情報だけでは完成しない，人の意見を聞いて受け入れる必要がある活動を取り入れます。

三 声なき声を声にする　学級通信で紙上討論

声に出して伝えることができない正統派は必ずいます。その「声なき声を声にする」方法です。A4半分の紙に，教師が学級を成長させるためのテーマ（例：優しさとは・かっこいいとはなど）を提案し，テーマについて自分の考えを書いてもらい回収します。そのテーマをタイトルにして学級通信を発行し，それをもとにじっくりと読んだ上で共有します。感じたことや気付いたことをふり返り用紙に書いたあと，それをもとに話し合います。みんなの考え方を読むだけでも学級の雰囲気が変わっていきます。

11 授業の邪魔をする・妨害する子

先生の困りごと

授業の妨害になることをいろいろとする子どもがいて，かき回されて，思うように授業ができません。

あるあるパターン

① 「〇〇さん！」と全体の中で注意し，指導をする。
② 言うことを聞かないからと放置する。

なんでこうなるの？

一方的でつまらない授業になっている

子どもの言い分を聞くと，「手を挙げても当ててもらえない」「発言を取り上げてくれない」などという声が聞かれます。教師としてはその子どもを無視しているつもりはなく，他の子どもと同様に指名しているのですが，無視されるということを理由に教師の指示を無視したり，きつい口調で友達を注意し，しつこく相手の子どもに詰め寄ったりという状態となり，教師の指示が通らない状況になっていることはありませんか。それが，学級の雰囲気を悪くしている可能性があります。

また，何をしたらいいかが不明瞭な場合に，分からなくて不安になるため，周りにちょっかいを出したり，立ち歩いたりすることが増えてくると考えられます。

あったか秘策　Change!

11 困った子は、困っている子その子どもの困り感を知ることから

一 つまずきを知る

その子どもが「学習面」「生活面」のどこで困っているのかを知ることが支援のスタートになります。「学習面」では，中学生であっても，九九がまだおぼつかなかったり，分数のわり算ができなかったり，割合が理解できていなかったりする子どもが教室の中にいませんか？また「生活面」では学習道具の忘れ物が多い子どもやじっとしているのが苦手な子どもなど，学習に向かうための準備の段階から支援の必要な子どももいるかもしれません。「どこで何につまずいているのか」について子どもに直接話を聞いたり，アンケートをしたりなどの調査法で確認します。

つまずきを知るための方法として，支援別表☞p.133を作成するという方法もあります。

二 その子どもがどうしたいかを知る

つまずきが分かったら，次なる一手はその子どもがどうしたいと思っているのか，「（勉強も助け合える）相性のよい子どもが近くにいてほしいのか」「休み時間に話を聞いてほしいのか」「加力など支援を増やしてほしいのか」などを教えてもらいます。

三 具体的な対応策を考える

通常学級の一斉授業中でもできることとして，「問題数を減らす」とか「別の課題をやる」，あるいは「教師との間でサインを決めて，分からなかったら教師に合図を送る」など，子どもが望み，教師ができる支援の方法を一緒に考えます。子どもに，「何ができるようになりたいか」について聞き，具体的な対応策を一緒に考えます。

12 授業中にケンカをする子

先生の困りごと

休み時間にトラブルがあったらしく，授業開始時にブツブツ言いながら顔を赤くして怒っている様子がありました。授業中に，そのことを急に思い出したのか，突然相手の子どもに突っかかっていって，ケンカが起こることがあって困っています。

あるあるパターン

① 悪いのはどちらかをその場で決めようとする。
② 安易にその場だけで，お互いに「ごめんなさい」を言わせて表面上の解決でしのぐ。

なんでこうなるの？

我慢の限界を超えてしまった

休み時間に起きたトラブルやケンカが解決できないまま授業が始まってしまったことが想像できます。

怒りが冷めやらぬまま，興奮した状態で授業が始まってしまった状況だと，教師の話も耳に入らず，何かのきっかけがあればまたすぐに戦闘モードに入ってしまいます。子どもたちにとって，休み時間は学校生活の中で，友達と自由に遊べる時間なので貴重な時間ですがトラブルも起こりがちです。

あったか秘策　Change!

12 集団で起こったことは集団に返す

一　休み時間の情景を知る　～ケンカが起こる一言～

授業中に起こるケンカの中には，休み時間に起こったケンカをそのまま引きずり，それが原因になっている場合も往々にしてあります。日頃から，休み時間の子どもの様子をよく観察して，どんな遊び方をしているのかを見て知っておくことや「ケンカが起こる一言」をキャッチしておき，違う言い方を学級全体で練習しておくなどケンカの予防に努めます。

また，休み時間が終わって教室に入ってきたときの子どもの表情をよく観察し，もしも苛立ちや興奮している様子が見受けられたら，「どうしたの？何かあったの？後で話を聞くからね」と本人の感情を受け止めていることを伝えます。

二　ケンカは学級経営のチャンス　～ケンカを解決するために～

予防策を講じていても，ケンカになってしまうことはあります。そんなときは，学級経営のチャンスと捉えて，当事者が落ち着いて話ができる状況であれば，ケンカの解決方法を学級で考えます。

① 何が起きたかを，当事者たちがみんなの前で話す
② 学級の子どもたち全員がその状況を知る
③ 自我関与して，ケンカの解決あるいは予防について考える
　あなただったらどうする？
　あなたは，こんなときどうすればよかったと思う？

三　ケンカにならない付き合い方のレパートリーを増やす

ケンカの具体例を示しながら，自分はどんな行動をとっているかをセルフモニタリング☞p.134し，どうすればケンカにならずにすむのかを考える時間をとります。誘い方や断り方，謝り方のソーシャルスキルトレーニング☞p.135を取り入れ，ロールプレイ☞p.138を行い，「あなただったらどれができそう？」とケンカにならない友達との付き合い方のレパートリーを増やします。

13 何に対しても反抗する子

先生の困りごと

授業が始まっても教科書や学習用具など必要なものを出しません。注意をすると，どうしてしなきゃいけないのかと言ったり，配ったプリントを投げたりします。

あるあるパターン

① なめられないように対応を厳しくする。
② 「いい加減にしなさい」と感情的になる。

なんでこうなるの？

注目欲求・学習性無力感から

今まで，教師から叱られたり注意されたりすることが多く，教師との信頼関係が築けていないということはないでしょうか。そのような場合，教師の言うとおりに行動することが，自我の損失につながる感覚があり，無意識に自我を取り戻そうと抵抗してしまい，主導権争いになってしまうことがあります。

また，「自分もやればできる」と認めることができず，やる前から課題に立ち向かう勇気をもつことができなかったり，やっていることの意味や意義が理解できず，やる気が起こらなかったりする状況になっていることも考えられます。

プライドが高く，できないことを見られたくない，認めたくない場合もあります。

あったか秘策 Change!

13 対決のIメッセージ

一 対決のIメッセージ p.135

無視もせず，挑発にも決してのらず，感情的にならず，こちらの思いは伝えます。「あなたは……」で伝えると攻撃と捉えられて心を閉ざしてしまうことがあるので，「私」を主語にして，一人の人間としての思いを「私は……してほしいです」と伝えるようにしましょう。指示は簡潔に「〇〇をします」と行動レベルの指示を出しましょう。子どもがとりかかるまで言い続けるのではなく，「後で話す時間をつくります」と伝えて，学級全体にも指導をしていることが分かるように伝えることが大事です。

二 できていることを見逃さず，すかさず認める

自分への指示や注意に対しては遠慮なく反抗できますが，自分のことを認めてくれる言葉かけは否定しにくい心理が働きます。信頼関係を築くため，よくないところに目を向けるのではなく，よい行動をした瞬間にすかさずフィードバックし，存在承認や行為承認の言葉かけを行っていきます。プライドがやけに高い場合には，教師を手伝う立場で授業に参加させたり，柔軟なペア・グループ学習で子ども同士の勉強の助け合いにつなげたりと「できない」ことが目立たない支援を入れてみましょう。

三 楽しく学びのある授業

授業が成立することを優先しましょう。学級全体に焦点をあて，楽しい学びがある授業成立を目指します。この授業に何が必要で何をやっていくのかについて視覚支援を行い，見通しをもてるようにします。

授業の形を揃えることより，子どもが主体的に参加したくなるように授業内容や発問を工夫しましょう。生徒指導の３機能を意識した授業を行いましょう。「高知市の子どもたちの未来のために　不登校支援ハンドブック」（高知市教育委員会，2021）の「10 自己指導能力を育むこれからの授業」が参考になるでしょう。

14 注意に逆切れする・反抗的な態度の子

先生の困りごと

教師が指示したことに対して，「うるさい」「だまれ」と反抗するので，困っています。また，あまりにしつこく言うので相手にしないでいると「無視かえ」と挑発してきます。

あるあるパターン

① ムッとなって，こちらも無視する。
② 「そんなことを言っておかしいな」などと皮肉で返す。

なんでこうなるの？

教師に邪険にされていると感じている

教師に叱られたとき，「他の子には言わないのに，どうして自分ばっかり叱るのか」と，感じているかもしれません。自分が教師から邪険にされているのではないかと被害者意識が強くなっていることも考えられます。

14 ないがしろにしない 大切な一人であることを本人たちが感じる

あったか秘策 Change!

一 とことん向き合って不平や不満を聞く

無視しているわけではないことを伝えるための秘策は，まずは「とことんその子と向き合う」ことです。「無視かえ」という言葉は裏を返せば「無視しないで話を聞いて」ということのサインです。この子どもたちの負のエネルギーは，学校全体をマイナスに転がすほどの影響力があります。放課後や休み時間，給食や掃除のときなど個別に話しかけて不満や不平，怒りやつらさなどを聞き，感情に寄り添って，相手の懐に入り，「つらかったんだね」「そんなふうに思っていたんだ」とちゃんと気持ちを受け止めたことを伝えます。

二 今できていることを認める　～間接的に認めることも効果的～

その子どもが既にできていることや，例外的にできたことをすかさず見付けて認めます。教師に反抗的な態度をあからさまに示す子どもには，「ここのグループは友達の話がよく聞けていて，とってもいい話合いができているね」など「間接的に認める」ことも効果的です。思春期でイライラしているようであれば，少し距離をおくために教師からの直接支援は減らし，子ども集団の一員として認める・つなげる間接支援を増やしてみましょう。

口頭の注意や指示，禁止よりも，机間指導の際に「ここがヒントだね」とさりげない指差しで視覚的にヒントを示したり，「近くの人のノートを見てもいいよ」「分かったことを伝え合ってもいいよ」などの支援のための子ども同士がつながるための促しをしたりしてみましょう。

三 負のスパイラルを逆回転　～あと〇〇ができるともっといいね～

秘策の三つ目は，この子どもの負のスパイラルを逆回転させて「成長」につなげる秘策です。「近頃頑張っているね。あと〇〇ができればもっといいね」と成長した自分を意識できる言葉かけをします。〇〇の中に入ることは本人に「あと何ができるようになりたい？」と尋ねるのも効果的です。

15 教師の注意の言葉をマネする子

先生の困りごと

授業中，私が子どもを指導すると，別の子どもが私の指導の言葉のマネをして，ばかにしたような感じで，一緒になって注意の言葉を言うので困っています。

あるあるパターン

① 「自分たちで注意し合って」と子どもたちに言う。
② 「やかましい。静かにしなさい」と一喝する。

なんでこうなるの？

子どもたちは，教師のマネをしてふざけている

子どもは教師のマネをして，一緒になって注意し，面白がったり，楽しんだりしてふざけているのです。

マネをしている子どもの思いは様々で，ばかにした，面白がって注目させたかった，教師気取りだった，軽く言ったつもりだった，などが考えられます。

あったか秘策 Change!

15 マネをされた気持ちをロールプレイで体験

一 ロールプレイで体験

シナリオを作って，ロールプレイ☞p.138で体験します。

① 教師に叱られている子ども役

② 教師のマネをしている子ども役

ロールプレイで体験後，①の叱れている子ども役に，「マネをされたらどんな気持ちだったか」を考えさせる振り返りを行い，その気持ちを全体に共有します。

その後，今後はどうしていけばよいのかについて，学級全体で話し合います。

二 プラスの言葉かけをする

教師は注意するときに，マイナスの言葉かけは極力避け，プラスの言葉かけにします。例えば大声で騒がしくしている子どもに，「静かにしなさい」という否定形はマイナスの言葉かけであり，「静かに聴けるといいね」という肯定形はプラスの言葉かけになります。

三 命に関わる場面ではマネしないことを約束

命に関わるときや危険を感じたときなど，必要なときは，「そこやめなさい！」などと教師が強く注意をすることもあります。子どもたちには事前に，命に関わる場面では教師のマネをしないことを約束しておくことが大事です。

四 落ち着いた声や低いトーンで

個別指導をする際，学級全体に大声で注意をすると，必要以上に子どもたちを刺激してしまうことにつながり，オウム返しが起こりやすくなります。個別指導の際は，指導したい子どもに近づいて，落ち着いた声や低いトーンで注意するようにします。

16 授業中寝る・机に突っ伏している子

先生の困りごと

授業中，机に突っ伏していて頑張ることができないことが多く，１時間目から寝ています。起こしてもなかなか起きないので困っています。移動教室なのに一人で教室に残ることもあります。

あるあるパターン

① 揺さぶってたたき起こす。
② 「また寝ゆうね」とそのままにしておく。

なんでこうなるの？

家庭的な背景やつまらない授業

子どもが家庭的な背景を抱えている場合もあると考えます。その場合，昼夜逆転が起こっていることもあり，昼間に眠たくて，授業中に寝てしまう結果につながることもあります。

また，「授業の内容が理解できないのでやってもムダ」「教えてもらう仲間がいない」「授業がつまらない」「そんなこと分かってる」という気持ちになってしまう授業自体の問題も考えられます。

16 過ごし方で寝る以外のバリエーションを探す

あったか秘策 Change!

一 寝ている状態を放置せず，本人に困っていることを聴く

机間指導で様子を見に行きます。少し言葉をかけるだけでもいいので，放置しないようにします。教師が無視をしていないということが，周りの子どもにも伝わるようにします。

突っ伏しているときには，励ます関わり（起きてできることを示して，課題着手まで促す，付き合う，少しでもできたら〇を入れるなど）を入れます。

「分からない，つまらない」⇒「寝るしかない」状態になっている可能性もあります。「何に困っている？」「ここ写したら？」などと言葉をかけます。子どもが自分で決めたことに取りかかることができたら，すぐに肯定的評価をします。

二 小さなプラスの変化を見逃さない

小さな変化を見逃さないようにします。例えば，いつも伏せていた顔を少しでも上げたときは，顔を上げる前に何があったのか，また何に関心があるのかという例外探し☞p. 138をします。それが分かったら，試しに同じことをやってみます。「例外を見付けて，例外を広げる」ということです。

本当に寝ている子は少なく，実は周りの話を聴いている場合もあるので，「大事なところは聴いてね」と話すことも効果的です。

三 初めて寝たときの対応が肝心

寝てしまう子どもへの対応は，寝ていないときに声をかけると効果的です。学年会で話題にし，どのような言葉かけをしたときに改善したかを共有してみましょう。寝てしまう子どもとの関係がよい子どもが，その子どものことを思って「起きる」ように伝えるのもいいです。最初から寝る子どもはいません。日常化する前の初期段階（初めて寝たとき）での言葉かけが大事です。

17 取りかかりに時間がかかる子

先生の困りごと

授業中，板書を写すときや次の活動に移るとき，すぐに取りかかれない子どもがいます。周りの子どもたちは既に次の活動に移っているのに……。

また，やらないといけないことは分かっているのにぐずぐずして，すぐ取りかかろうとしない子どももいます。

これが毎日の光景なので困っています。

あるあるパターン

① 「早く早く」「早くしなさい」という注意ばかりになっている。
② 仕方がないから置いてけぼりにする。

なんでこうなるの？

全員に指示が行き届いていないため，子どもたちは何をしなければならないのかが分からず，取りかかれない

何をしたらよいかが不明瞭だと，子どもは分からなくなって不安になり，自分の好きなことをし始めたり，周りにちょっかいをかけ始めたり，立ち歩きを始めたりしてしまいます。あるいは，ぼんやりしてしまい，ついつい取りかかりに時間がかかってしまう子どももいます。個々の学習のペースがどんどんバラバラになってしまいます。これでは，教師の支援や注意が際限なく増えることになってしまいます。

あったか秘策　Change!

17 指差し確認でスタートを揃える

一 指差し確認でスタートを揃える

まずはスタートを揃えることが肝心です。「今日の授業で使うものを机の上に出します。三つあります。ノート，下敷き，筆箱」というように，必要なものを全員が整えたことを確認して，授業をスタートします。黒板に指示内容を書いて示すと，再度口頭で伝えなくても，「指差し」だけで確認できるのでおすすめです。学級のルーティンにして定着させましょう。

二 机間指導でサポート

授業中，取りかかりに時間がかかる子どものところに早めに行き，「これを書くよ」と端的に声をかけましょう。席を前の方に配置するのも有効です。課題に着手できたら，「書き始めてるね，OK！」と，ノートに〇をしたり，子どもの机やノートに触れたりして，OKサインを送って，やる気が持続できるようにします。

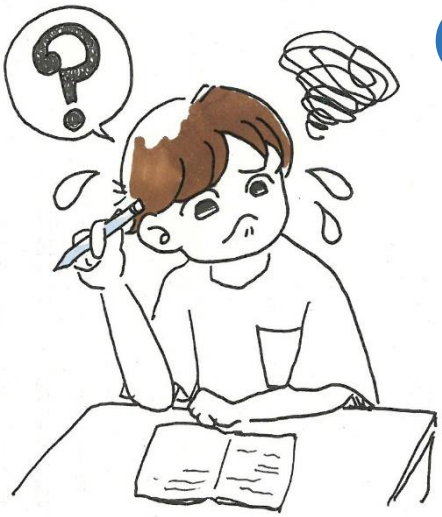
板書に区切りが付いたらすぐに子どものもとへ行きましょう。目指すは「黒板に張り付いた指導からの脱却」です。一度に全員のところに行けなくても，時間を分散して机間指導する方法もあります。

三 一指示一行動

「プリントを配るね」「すぐに名前を書きます」「書き終わったら鉛筆を置きます」「ノートを開きます」「今日のめあてを書きます」というふうに，一つの指示で一つの行動をさせるようにします。

「書き終わったらノートを上に挙げて」「隣の人と確認しよう」というように，全員の活動ができているか，その都度確認をし，一人も置き去りにしない進め方を意識しましょう。「〇〇できた人は立ちます」「△△したら座ります」など，立つ・座るという動作を伴った指示も，全員の活動の状況を把握することができます。

18 ノートに書くことが苦手な子



先生の困りごと

私の学級には，ノートに書くことにとても時間がかかる子どもや，書くこと自体に抵抗がある子どもがいます。「早く書きなさい」と注意しても，なかなか改善しません。黒板の内容をノートに書くことって，そんなに難しいのでしょうか。

あるあるパターン

① 「早く書きなさい」という注意ばかりになってしまっている。
② 追い打ちをかけるように「書き終わらなかったら宿題ね」と告げる。

なんでこうなるの？

「ノートに書く」という行為は，複雑な動作から成り立っている

一見簡単そうに思える「板書を写す」という行為も，実は，「黒板を見る」→「黒板に書かれてある内容を読む」→「記憶する」→「ノートを見る」→「書き始める」という複雑な動作から成り立っています。

「ノートを書くことが苦手」と一口にいっても，何に困り感を抱えているかは人それぞれです。黒板とノートとの視線の行き来が苦手，短期記憶が苦手，字を書くこと自体が苦手，ノートにどう書けばよいか分からない，意欲が低いなどです。

さらに，自分の考えを書くということになると，ますます困り感は大きくなるでしょう。

あったか秘策　Change!

18 「書く」ことを補うための支援方法を工夫する

一 授業中にすぐできること

困り感の背景分析をできればよいのですが，まずは目の前の困っている子どもにすぐにできる支援を届けます。例えば，書き終えた子どものノートを教師が借りて，困っている子どもの手元に置いてあげることなどです。子ども自身や学級全体で「友達が書き終えたノートを借りる」ことを当たり前の関わりとして評価しましょう。板書の際にもできる工夫があります。例えば「手をグーにしたくらいの大きさで描こう」「１マス空けるよ」など，細かく指示を出しながら板書していくことも丁寧な指導ですね。板書とノートが同じになるように書き方を揃えると，本人も書き抜かりに気が付きやすくなるかもしれません。書き方を揃えておけば，机間指導の際に，子どもがノートをどの程度，どのように書いているかも確認しやすくなります。

二 授業の事前準備でできること

板書計画を事前に作成している場合は，実際にどう書いたらよいか分かる見本のノートを電子黒板に映しておいてもよいでしょう。また板書計画のコピーを子どもに渡してもいいですね。一斉指導内で個別の支援を行う場合は，「なんであの子だけ？／私だけ？」と周囲と本人に過度に違和感が生じないようにすることが大切です。そのためには，コピーを複数人に渡したり，必要な人は使っていいと全体支援の選択肢の一つにしたりすると自然です。板書が苦手な子どもが比較的多いと感じる場合は，大事な言葉を穴埋めできるワークシートで学習するのもよいでしょう。

三 GIGAタブレットでできること

学級全体がGIGAタブレットの使用に慣れてきたら，板書内容をGIGAタブレットで撮影して記録することやキーボード文章入力機能，音声入力機能を使って記録することも支援の一つとして活用できるでしょう。特に，板書より思考に時間を使ってほしい活動では有効ですね。

19 苦手なことは「やりたくない」と言う子

先生の困りごと

自分の好きなことは率先して取り組むことができますが，苦手なことはぐずぐずして，「やりたくない」とやろうとしません。

あるあるパターン

① 「やってもないのにやる前から諦めない！」と，根性論で責める。

② 「好きなことはできるのに，わがままじゃないの？」と言ってしまう。

なんでこうなるの？

「取り組んでもできない自分」がイメージされるので，やる気を失っている

苦手なことに対して，なかなか取り組むことができない子どもは，今までの経験で，「やってできないよりも，最初からやらない」ということを選択しがちです。そして，「やっても意味がない」などと課題を否定することで，自分を守るのです。「やりたくない」という言葉は「ワクワクしない」「おもしろくない」という感情の他，自己防衛のために発している言葉でもあるのです。

あったか秘策　Change!

19 やってみたくなる仕かけをつくる

一　意義や効果を語る

授業の最初に，「なぜこれをやるのか」「やることでどうなるのか」を話します。

（例）「なぜ分数を使うのか」についての説明

10を３つに分けると，3.3333……といつまでも３を書き続けなくてはならず，とても大変です。そこで，$\frac{10}{3}$と書くと，完璧に３つに分けることができます。

分数の計算の考え方は，ゲーム機やパソコン，スマホのソフトを作るのにとても重要なものです。宇宙船を飛ばすのにも使われています。

二　作業はスモールステップで　～これくらいだったらできそう～

作業の行程を短く区切り，黒板に流れを提示します。図や写真を使うとイメージができやすくなります。

また，「失敗なんてない，とりかかることだけで成功！」「チャレンジこそが，最も大切である」と機会あるごとに「教師は結果ではなく過程を評価している」ことを伝えてみましょう。

スタートがスムーズにいってないようであれば，近づいて「困っていることはないですか？」「まずね……（最初の一歩を手伝う）」と声をかけましょう。一つの行程ができれば，「（ここまで）できたね！」とすかさずフィードバックしましょう。千里の道も一歩からです。

三　子どもに付けたい力　～他のやり方はないか考えてみる～

例えば，子どもたちに付けたい力が「分数の計算ができるようになる」のときに，授業の中でどのような活動を計画しますか？同じ45分（50分）の時間の中で，どのような活動をすればより効果的か，教材研究をしてみましょう。よりワクワクする内容の方が，やる気も上がって，「できた」「分かった」につながるものです。

20 手遊び・文具遊びをしている子

先生の困りごと

手遊びや文具遊びって，どうやってやめさせたらいいのでしょうか？注意してもなおらないし……。

私が説明をしているときに手遊びをしているので，「どんな話だったか聞いていましたか？」と尋ねると，案外ちゃんと聞いていたりもするんですよね……。

あるあるパターン

① 「何やってるの」と叱り，遊んでいる文具を急に無理やり取り上げる。

② 「こんなものは捨てます」と言って，文具遊びで生まれた創造物を壊す。

なんでこうなるの？

手遊びにも様々なタイプがある

手遊びにも様々なタイプがあります。つい自分の世界に入って手遊びしてしまうタイプ，授業が分からない・つまらないから手遊び・文具遊びをしてその場をやり過ごそうとしているタイプ，ストレスから気を紛らわせるために手遊び・文具遊びをしているタイプ，つまり手元の多動性としての手遊びと授業に対する不注意が連動しているタイプと，手元の多動性としての手遊びと授業に対する不注意が連動していないタイプがありそうです。まずは私たち教師の「手遊び」や「文具遊び」への見方をほんの少し変えてみませんか？

あったか秘策 Change!

20 手遊び・文具遊びへの見方を拡げる

一 手遊びが思考の妨げになっているタイプ

① 自分の世界に入り込んで遊んでしまっているタイプ

呼名＋動作を入れると学習に戻れることがあります。机間指導で近づいて本人の視界に入り，「〇〇さん，教科書の問題文を読んでくれる？」と，今やることを指示するのも有効です。

② 授業が分からない・つまらないから時間をつぶしているタイプ

ペア・グループ学習を活用して友達と話し合う場面をつくったり，身体を動かす活動を取り入れたり，思考の手続きやヒントを全体や個別に示したりすることで，授業理解のための支援をすることが重要です。

③ ストレスから気を紛らわせているタイプ

休み時間や放課後に声をかけたり，意識して気になる子どもの情報を集めたりして，ストレスの原因に働きかけることが求められるでしょう。

④ 手元の多動性と授業に対する不注意が連動しているタイプ

「手遊び止めて！」と注意する前に，授業に意識を向けさせることができるよう「今，ここをやっているよ」とか「教科書〇ページを読んで」などの言葉かけを行うようにします。

二 手遊びが思考の手助け（ツール）になっているタイプ

手遊びをすることで思考に集中できるタイプの子どももいます。見極めのポイントは，真剣にテストや試験に取り組んでいるときにこそペン回しをする癖があったり，手遊びをすることでストレスから気を紛らわせたり，心を落ち着けたりしている様子があるかどうかです。その子どもにとっては，その瞬間，手遊びが“必要なこと”なのかもしれません。手遊びが思考のためのツールになっている子どもであれば，他の友達に迷惑をかけていない程度は教師が一定“受け流す”ことも，指導の選択肢の一つです。

いずれにしても，「手遊びを一方的に注意する」ということから教師側の思考を変えて，「手遊びをする暇がないくらい楽しい授業をするぞ」という心意気で，授業づくりに臨んでほしいと思います。